浦里
時次郎

明烏後の夢

初編 中

へ13
2909
5

へ 13
2909
5

明烏後正夢二之巻

第三 眠

能勢文庫

子故の闇ふ迷ふ身のどぐく来る門の口。障子
越くら口ヤチトあの尋ごごろ此邊ふ
時次郎夜とる人がいらるとげるが。ばぞんどるう
おしへるされて下ざりとり。夢かをて陰ど
のうち時アコレくお里。ありやさうな女房眠ば
實親正右ゑ門夜ぞしてをと知らしをら。どの

明治九年
六月二十日
購求

はらさけてあるやうなぞ。そるゝことをきゝれぬがさい
ふ。らいてふいてくりや。あるくといひさして
細戸のうちへひそみいる。跡よりおぢはうろ〳〵と
ゐるゆとあのさうせん放も。後ざまうの女家のそば
ろくむねを押ゑづめ。陸ゑを伺て圍ハイ其時
次郎さんとやらいふお人ぞ。エアノ二三年イヤ二三日
以前。どこへやら引籠ているとまゝて。ゐるそばぐり
まとぐるゐやせバ遠方のお方らいふお家

嘗めさぞお者邪ゐるさんしたでごぎんせう。アノ〳〵
おゝゐるさんしてゆうとお休ゐるさんせこいふも
おどろきさ里ゐまう。さとが正西あうと異名
を取〳〵かさ殺父のかさを眼ゐさんそゐとこゐて
とり圓八ア成程〳〵引籠まゝでござあう。
時次郎とハゐのそゐのてゐ時をうしの日陰め彩
嘗ゐ二百〳〵ゐ四日いろ〳〵ゐ出んたうもく
アさぞゐんぎゝておやまもせう。まゝうゝごたづゐ

あるく歩行と知りても。成るべきあるべきまいく。たしかや
道理でござる。たくさん人てそそられ山賊なれ。あん
まりと義理だてそ水くさひ久く。イヤたう
さぶ知らぬお人よ山形よりけもるの貴てて。山賊
賊なれハ遠でも遠てあるとおりとたやろうら
年くれべたーるんでも最初よりまもと。ひれ傾
うらみ。イヤ少ひの数く。一す遠ふさん人でもんん
切よりてござる所ふ。たるのーてもなゆう。袖

ふりあうも縁と思ふ。お借申さるんのちー。お借申
やう家安メ思ふ。ひろまんでの別の上だるの。必
ちやてござりあり。下辺ハ上縁のもの
四たんとりよ百性でござりまとぶ二人持さ子ども
のうち。お頃ハ若源よ恋ー。妹ハ江戸の賊
春日屋由兵衛とりよ内の悴。時次郎（ものあるを
さるーて。ものとー山江戸へうとーまーさる。振
分髪のどるんぜむる。笑事ハ思ふうとまらこけ

を知らぬ。それより〳〵中こうそぐち合まし〳〵と
が。りう年ごろ。もろくさ荒あらちあて婚れい
させうとりゑ変ゆへ。こらしもあ金ぢ戸へ出て二人りが
子簡と咲されが。たがひよろうこんで婚礼ちゐ
友。ゆきこれ〳〵や〳〵。是こらもそ又。初孫の親ゑるが
たの〳〵みと思へば。地頭様の旦那て江戸へ出るもこん
さくぐんふも思ひう〳〵りゑんざぐふ〳〵と裏ゆら
ゐ〳〵しの。要用ぐんこう悪度が。イヤあ〳〵せうるん

ゆるりあろ〳〵ろ。夜ろ之ひるとろ〳〵傾城ぐるい。由ゑ藩屋
を中ちゆういろるれど。若イ者のふみちゃろ
出入屋補の揚門もみろる。娘のもいひたけて。
かるぐどとまんきちゆんること。由ろ屋もぬぐうて
やり〳〵ぐろいゑ自ぬ義理ゑるりゑ。
その到深さ傾城を連〳〵曲海を矢落。そ
沒法を変とひ〳〵く。あのぐこの申ゑ藩屋ろく
ひろうのるるれども。先祖代ろ変法ぐ。寿日なの

家をかくれぬと。久離切て墓番と。変て
びつくり。ア是迚もるの。それゑ竹ケてもふびんる
ハ娘の眼。そうよくれてるひそだろうり。サヅ忘
知もいたろうぐちうとのゑ。ぢろとこらて
ふたりの親人。孝行作てて居ゑ。ア我子る
ぐらもよみちんぐうちをる。それでこそ正ちつぐ
娘ぐやこ。変ことふたりでほあて居ちーーぐ。
跡の月の初メ方ら。どけぬ忍ひのくずぐぐ

作りのおとるの。雪ありうらぶらぐと。
日増よおりる変ゑも。家よつうときひてよを。
変ぐうちの国よみるるもあうれぞ。ろーもづ
ちよ出く来まーて。おりや他人ハチト変づい
変るれど。るの河ぐさよんもくりプコレあてるヨ。
時次郎斗りが男でるのぞ。きそわをこ立てる
女房をふり捨。おまつさん両親ちも難義のる
変もかうるぞ。曲海の女郎を連て欠落をる

拍る。人形る聲を持せさきあれがあやまりぞや。
是くふハ去ル人連て行て。れろ死とこまろだる
聲を取てこんせる。如るふぜんを せもくうず。
早く幸後きりれよ去やれとぞげを 結うも
子の可愛サ。それふ引うん狼ハ。コレこさんその
拍子ぞふくる哀いよてぞさんきる。縁でそあれ
ひろど戸とこ縁。べぐらし中を夫婦とるよくく
涼イ縁者のちるこ。狐とあやとのとく幻で。猪ぐ

縁へ神々拍のお引合そこをアア我まくらく。
あ門この手持ゲコるひこて。聲とるの縁付ケのと。
モウ〳〵けぐらこの哀吹ともるのと。夜ニ引
かるりてあいきこもあるまのせぬ。人がりふりぐ高の
上塗。くたるこぬいんきるも可愛サ流まくよ。
たとこ人あぐき死きるとめ。こきそ式たくぬく狐が
心底。是非よおよびませぬ。是を男べ初イ時貞
女あ夫ふまこ人どるのぞこぐぬ吹哀ぐ写を。

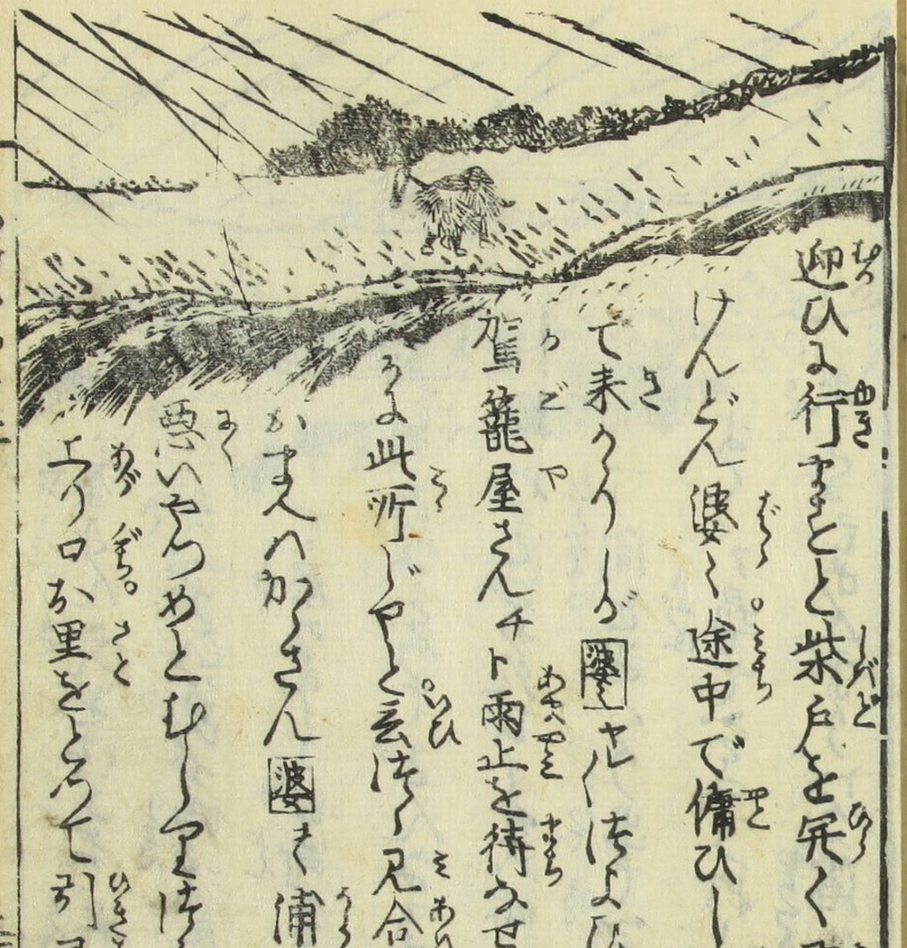
定言すれどもよおく〳〵さぐ。今ぞいろうて後悔しゝことと。
やうやうと涙一ト雫。お里いねよ立ッなこの涙こりゝゐる
浮世の義理やう〳〵涙をかゝ拭ひ。ぐるぞど隠ぐのお
咄しを受まゝこれ見ど考ふどのお方なれどおまへさん
がこのお心づひかてるさんと申の仕深切なぐめて味さ
ワさゝんはゝ〳〵悲ひ申他事のよう〳〵小ゝぞんじ
ませね。定めてかてるさんと申も女子さんも其女郎お
を身の欲ふ〳〵ひやう。斬さいるんても厭〳〵ねと云ふ

有まゝ申ぶ。女郎衆と
ても始めゝ〳〵さぐまる
内室の有ぞとハ和
らぐ考ゝ考ぬ仇
抜假寝のゆめも
ぞとぞ考ゝ其ゆ
ゝの救〳〵ぐぞり
くて晦日の月よ譬〳〵

信実をうらめしがり其人を果報拙きことなどいひ
べ愛しいぢん方の為に思ひ切りふわぐ猶ゐるこの
意の癖一ト夜逢ねべこしらえて逢べるれが正しモシ
浦里どのでいるいさ〳〵ね女中さん裏明さふかた方ど
と。ふふよ差ねこ言葉のそしぐ。時次郎が剃深の女子
も逢てゐるを。ちかの〳〵たく昔気質の野夫な身で
ふひるを〳〵をとるもうかるもどうでもおどうすとまひ
と推量ちて成よう〳〵と尋ねて来るうひゆるく。

時次郎が引越しと聞て長くの長ぐみ。時次郎がこの
辺へ。入るとぞもぞちこうこう正右エ門と云老父が来る。
傳言ちて云ふく笑せて下さるみ。いろあか世話に成
まるたとひつて立て暇ぐひ。心のそして帰て行く。跡で
お里ち胸せちり入る納戸の酒息ち病の床ち時次郎
がちの心根もいるのんと。ちひまんぐび正右エ門の不同語
ち縁切てのひとワまどぐ夫ぐとも言ぬちろと案
ぐどハ苦界ちあり〳〵女子ち似合ぬ不粋とさげーち

わるくちを人今更次郎さんよりわるくうぐゝ人居られるぞ。
ろひ切らねば愛しひ人の。為ようゝねこまろうぐゝ。
やらまれ因果づくとゝ名案小ふさぐる胸さえの癪を押へて
浦里へ門まろやか柔と呼声よ納戸のうらうら時次郎。
時イマカ木ゝゝ今裏口ゝゝ糸取よ巻ゝまゝ人何ぞ用ろといゝ人
声も。曇ゝまぐちゝる空の色花のゝとわゝゝ春の雨芽が斬
端の板びさゝ人かゝとゝる人わゞ小降出でゞ傘と取出ゝ糸
とろゝゝッイそゝゝまゝゝど此大降でハこチりイ走ゝう。チョット



迎ひよ行きまゝとゝ柴戸を矣く門の口五十歳程の
けんどん婆ゝ。途中で備ひゝ辻駕を後よりゝセ
で来ろうしが婆さんハ降でハあるコレアア
駕籠屋さんチト雨止を待ゝまゝ畠て喫ゝたゝ
ろよ此所ゞゝと云ゝ兄合とくわと顔ア
かまへかゝさん婆さ浦里のおのまゝマア
思いやりやとゝゝアたゝぐと廻ゝく
エろ口お里をろて引居ゝコレ駕籠

屋さん気を落て呉る人女ざかりの
気づひるの時次郎と云悪者が付
て居るゝ由断さるゝわ人老躰と
あるゝざるて。どんなるもを仕かるも
ねとゐあたらせば時次郎も女ゝく
一下間をさぐり出て別ゝお里がかえ
よゝア尋てゞゝれと夢ゝく尋て
来ることあんまりわる落着よ。らつたるも

んるゝよゝくの悪くのと途方もわ人金と女とを
引くても女ざとれアヤア親判の用アさ
道をぬ。篠塚様取あげわ人こと云ま
あだ。山名屋ゝも親元でゝゝわ人こと云
ぜわと毎日ゝ六ツゝやが出つ這入の大
えんざゝあげゝの果々出入場の産婦の鳥月
腹帯のと呼ま来るよ行るゝゝど百日近
く家業かせとと老躰と親を路頭よあよ

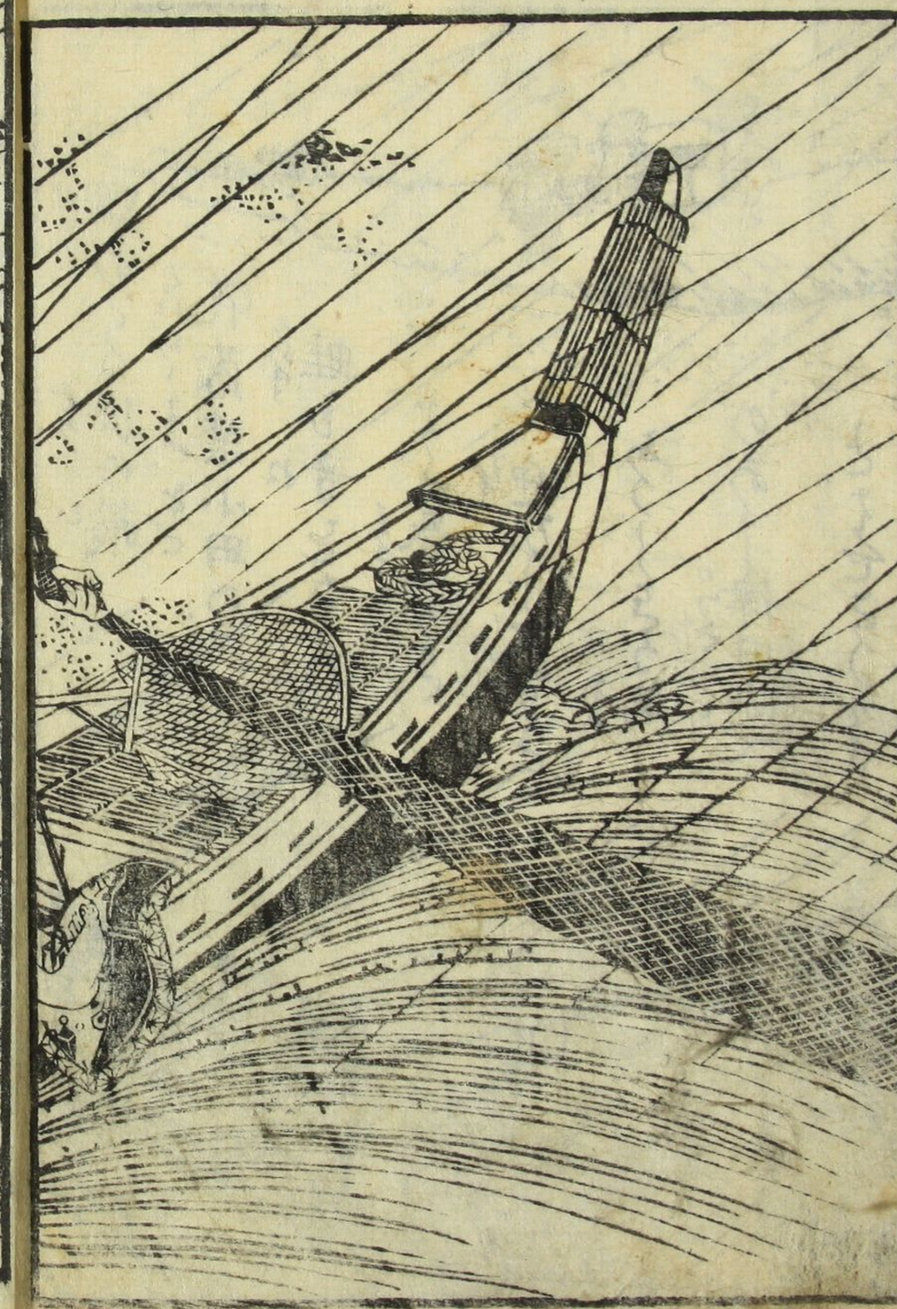
せこらの人ごのこゝろせば同じく野
郎どもも亭主ぶつくゝ里どのかゝんごのと
あんまりしゝ人をこゝろ〳〵ぶり其方のようなゝ
いくぢなゝを聟やゝ息子ようとるゝ人なゝ首で
も縊て死ぬぐまゝ。えうゝかさとを連て往て。ど
ぶろよせふやア此方の寂滅ヲイ駕籠屋さんと呼
入る丈れ直ようほうゝ辺四ツ手駕籠篠塚婆〳〵耳ようロ
ヲット合点とうるぐゝ駕うゝ目配をさとる抹組ぶ位

居るか里を引抱駕籠へのせると浦里ゝ〳〵アレマア無躰な
こしかゝさんふようもあんまりどうようるゝモ次郎さん
どうぞまうふまぞざんせぬうと。云をいいせど篠塚婆
く支へ止る時次郎をうて突退け大声よ娘を盗んぐ
ぢうしぢやうい。千葉家の重宝菅家の一軸とうて
宝物春日屋で紛失したと大略られも。時次郎ぶ仕業
であゝふと。出入屋敷の厳しゝ御詮義はかでり在
家を祈人の所ようびヨッポド運ぶ直て来と駕籠の

飛ちらす江のこゝろをとゝ里をわたる込賀茂
のうらつゝまよ玉さゝ涙の
の雨ものたくゝ見よと
ちぶさ。撲民市やぶりの
我も無者彼ゝ裏裾
をうゞけてゐるゝ。
賀茂堤引ゝ入田畝道

蹴あぐる泥の飛
花落葉小田の
蛙も音をうれ。
春ワさ。
迎ひゞまゝと
ふりしきる雨
のあ〜津田堤へ
とゝせうゝる

浦里



右浦里が船中ゑ落入ゑ張の説ハ第七回目ゑ見へ入ゑ児女ゑ本文ゑ成あやゝこの事

昔唄芳原大全　完五冊　南仙笑楚満人作

小糸佐七　そま人さく　うた川豊画

紫房糸　全三冊　瀧亭鯉丈作　溪齋英泉画

花暦八笑人第二編　全三冊　隅田川の花筏

大山道中栗毛後駿足第三編　三冊　紅丈さく　うた川豊画

右の絵草紙諸所ゑ出板いたゝく

武蔵ゑ武器の納まる名所ゑ猪囚の武家乃集さく。建続く居屋敷ゑ出入る職人猪商人連レさく、町妻御店軒を並べ四里に方。芙金散〻く繁花の土地水ゑ合さる江戸前の大蒲焼と猪木屋が茅勢を見世の腰障子。さゝやとあけく「ヨイあきう大きうあの所成よく頼まゝ。サア俊七紙二階ゑ居さう」「ヨヤ全六さん見へあそろんで。マアお二階へコレおらゝや。サアおヨヌ禁彩

盆〻今日ハ炭の値別よ出そうきえぬ火を頼まれ
まるそんなこるロ斗り〻こうのいろ〻ちやりまーさへイ
らくいらちやんまーと。先へ〻豆二階へ〻あつちやのとな
わがよろろ。此ほん立ノをとりあつくしく彼方元角ノ客の
方合ちー〻おや〻れ酒よいてーまをうゆ膳よ〻あ方
あ方コレ〻ト雨くよろてうあそよそうまそよなな
屁ナア〻アレモウいとうどざりまあ全六さんのうわがとせ
を久しのサトの拾階子ヲあやてく行〻全くの内ハ

下女まぐが江戸前ぐけりつるハ〻一時ハ全六さん
お噺といつハ〻全〻くてこれ今日ハ帳合イも日間
おやふんくちよつぴり今のせんさくおや〻コレあ人
ぜんぜんハ仏のおやゆうぷりやそうあるーぷそーく
角ふぐ拾ふぐやおてるさんのあうあうぐろう
てきあくぬぞやおまへるんと思のてうあうん若
且ぐ其當とあるこアあや差諾所日ぐだれやろと
とやひある天ゆも地ゆそうり昏のあ時次郎さん

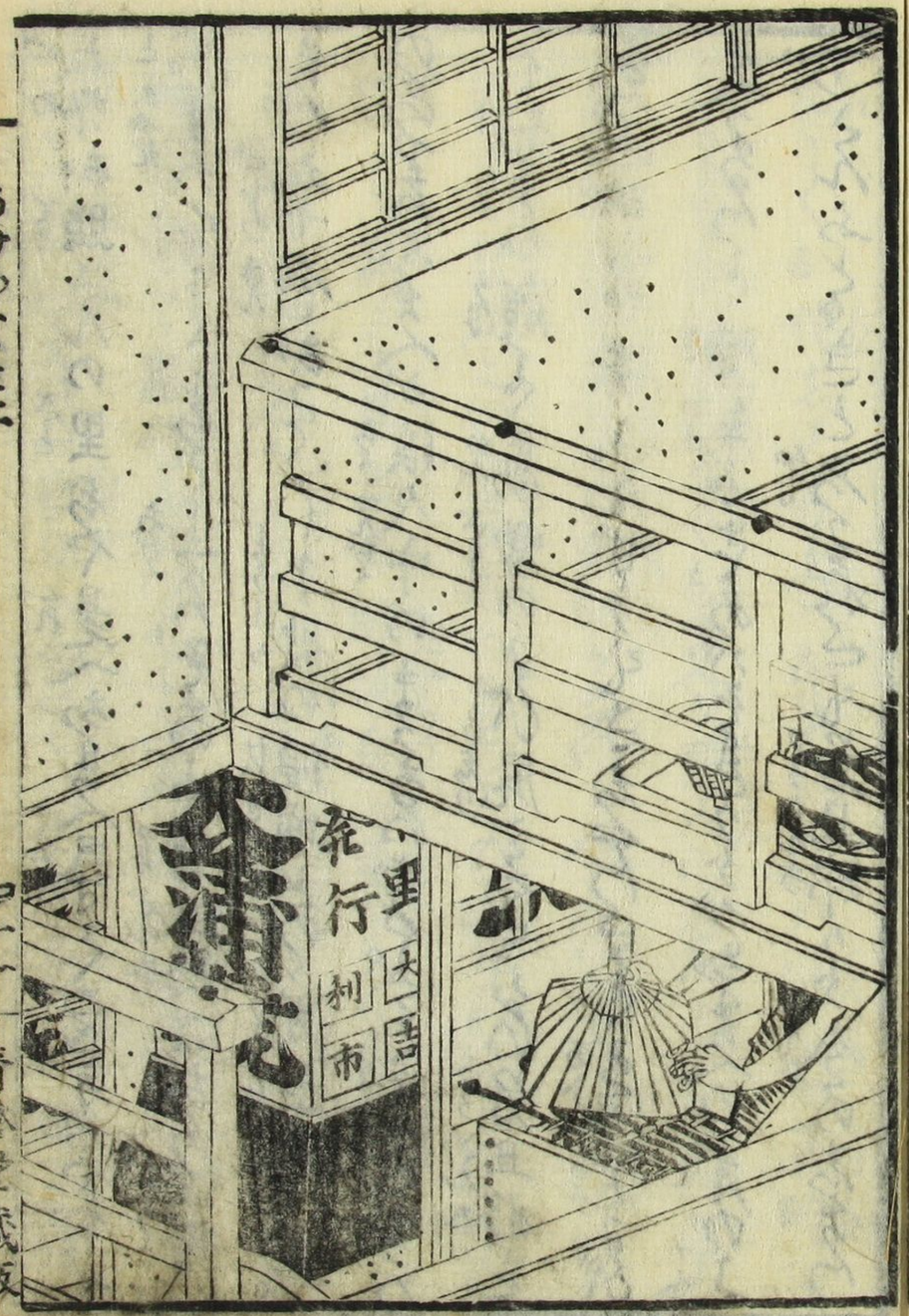
を久離切るや。血筋とのゝさゝちあるゝ斗りぞやぞんぜ
おゝやさんの甥ぞやゝ。居跡よゝろこゝく一家一チ門
シヤツとも云人ハるゝぞゝ。其ニア大切ゝの身をおるゝ
ぐゝくゝくゝく煩ゝくゝゝのゝ。チト折ゝゝゝゝでもゝて
げん氣ゝ有ゝれ。ハテ蚊ヒホがゝゝよゝふゝりゝけゝし
る奴ゝりやゝゝやゝるゝふゝゝいゝんゝゝゝゝゝん
まり律儀ゝるゝぞゝ。イヤ本藏ゝ今大切ゝ身ゝぞゝ
ハイゝく有がゝゝゝぞゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ切ゝゝゝゝ

下ゝゝ有板ゝゝまゝゝゝが。ゝゝゝ私ゝ心ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちつくんちゃ（ちつくの方蒲焼湯豆腐も出始後喰のこと）モシ全六さんモウ見てくれ
ると外ゴ足を引ぱり外ゴ思案ハちつ一ヤ、ナゼニく（浅ニマア）
考へてもどうぐうの現在ゴ叔母ちまでゴ。あんまり
心ゴ苦ゴかんちきぬ中の時次郎さんを追出して。
甥の苦ゴ人家とくさせてゴ世間ゴ済ませうゴ大
叔母ゴうゴ故ふ後脂さまるとやくべちんのあの
家よりちつとものぞきひどぎうませぬたぐうちゃうの頭
ゆゑ。若且那の勘當もえいとうくべ女郎買。連てく逃げ
あやまりちまでゴ。是ちとも賣物買物ゴ代さて
のくべ唯ちとかくぬとうちのあ其女をひけあ。
とうれいうんゴたちゴ。ゴうめんゴ若且那ゴ
持の車ゴうのゴ。お照さんの病気も若且那
の勘當ゴ。帰系さんゴあゴ本腹ゴあれさ
ゴ。ゴんき稼ちの心のあるゴあてるさんでもどぐうませぬ。
さまとれば叔母ゴ悪会ゴうちゴ身を引さゴ。
消ちく八方ゴ。ゴく納まるその段ハ五拾ゴ百の場合

モシこづみ臨時がありさうなくめづらしく足へぬアノあんせう。
こうこうハ翌日ゆも永を引あめ。ぞうをおまへの也ユ風ぐ
若且那の内帰系統俗ふあるのこやまあんト。ぜつてく皆く
全六ハりく祝ん云くく居たりしが。もだんでポント打撲る
うりく晋へこるりくさんよ。猶一トしわの源切教ゝやモお
まへの心ひさ出くさんぞのこうも我がわるさ自他五
人ハ大切とやふハ知るてくあるけるど。我が牙捨ての
深切ハコレマお出入ぞの也用うう小僧どもの寝小便を

引受くく居る支配人此全六も及ぬくト。モかんしん
あるくさ成程おまへのりんを面う斗ひまをよして
又おまへの出も留へせんぞやトいふくおまへの牙分つ紀
たりゆやうあるません。随分たち行のでける程の仕
様があるまんトいふけハマアとう者や明日お前一ト
包こうまとへ。てちんぞやろとウントいてあるれそこで
おまへハ其金弐持くく欠落ぞやさ。仕まそまや今まを
お前ゆもかうくあるダ。若且那の有様とハ上様の


全六
大吉
利市
発行

全六

五井お照さんの里おや是へ来まゝ尋ねくるおやたりや
不書へくるくゝ来くるそのうち若且那よあめよ掛り
まゞ五十金おくてゝ彼の傾城どの〳〵男をとるおや
のまつやあるへ人が浪人中のまろるのおやさて又こちへ
そ初てゝ顔ぐ勘當のうゑ尻こやもちの若且那と
ちろと日ゆやモウうんぜうもさちやうこぐあるとうゑ
さくるちく帰年がさめがそをとうゞ来まへの男の工
一ツうんふゝぎきとうるれさも若且那うゝ今のちまつ

委しくお侘ちくのうへ。おまへの今乃涙切が其時ハト
こうるでちいつ。夫まゝぐちあへが悪人ふちくのうへふゆや。
ちきけちれ其金の出処ゞちいゞや。といつくく且那から
出ゝく共ふといふ事ふい。ちいつこの通りの沢ゞやのん
鶏さちあく雄鶏も時次郎ゞ妻とこそ四人ちふね
といふハ初ちおやう昔ゝ貞女を捨ゝく貞女をたゝ。忠
義をさゝく忠義をたゝ。こあ一ハ源平盛衰記ゝ一八三
六さん呑ゝまゝ長田よあさゝ〳〵ちとゝ叔母ハ孝行

主人へ忠義二ツ道ケさ伐七が義心鬼とも蛇とも
ましう　仝　うんゝ爺やく。そんちら翌日の夜明るころ
アキ
をつゝまんへそ五ツ彼の一軸の文ハ付心當りが
あるまゝ文合よるまゝと。ユ合ハ内方を出れ
ユ面爺や。アカそまぐまゝ其形りで旅をでけぬさうん
ゝが入魂が地獄谷へ。條塚などとハく取揚がみる
爺や。紙そんく出るさうい其日いそまゝ落付くをたゝ
仕度拵ゝ。あさゝの夜明ちらゝ出ちゝ爺やそんゝが
明後日　未明

呑込ぎあるさうん。夜明ケてゝさうゝ出し追ふけ。
も方角ちがい。そカ爺やふゝく随ぶん心あべふ
コレ欠落爺やのゝくそろくと歩行落爺や。ハゝゝ
一のゝあみまゝさそんちゝゝやア全さんゝそて
居ゝも疵持足ちゝとも早く帰ゝまゝ仝ちゝ爺
そゝもそゝクひゝゝもゝ跡ゝゝぎと行まゝと後そん
ちゝふゝく翌日の朝。地獄谷の文紙まぐゝ爺
仝　ハアテゝゝゝ爺ア。高麗屋ぐけつるゝゝゝ。ゝゝ天ひ

伐七へいそ急帰り行跡ふんおくれく全六が。思ふが
長く生きと舌へ。下り歌と知られ色二人ハ三先きまく時次
郎めめくふへそうと。うの吉ぐ入ふ入ふと此毒薬
そまふもおくだきあめへ葛畠。こまくふ邪ハ
伐七めい。今日くくくせく尺付うと思ふ違
我七が心底。こまも同じく自滅の心ちとなる吉
ふふまく。あんまり飲むがむちくく。よくのようあり
百両の。金銭持々せく欠落させ。篠塚だふのと

とのせ。時をちぐくく夜泳ふたせ。おまも伐七が追
ふとして立て。其刻内ふ出合ぐら。婆アが中カ間
の悪物と調子合せくたろうとおくく百両メこ
の鬼五十両で山ふけふ首尾ふくいろさ祝酒めれ
がふの孫だふ戸一下捨りぐちの毒薬今と
ためさ犬ねまの。ふあくぐ二三返ぐどく
婆アまぐ。まふちぐくこの世のいとま。
あとぐ後口のふれぬユ風ちのう金ハ巻のぐ。

丸くまとまる百両へフレコウト。てゝそりや何よ巻てくく
もてうかうちの中ぎやゝてそもへさくく巻ふ
又サ春日屋のちんだれを。時次郎といく伐七まで
血筋の種切れ者さへ。千菓家の頭り菱家の
一軸ふんぎつ者さも由えへが老裏四人といく立く。千
葉家の荒川渕右赤門と翁子ヲ合且那ハ押込
無理隠居てつぺん付よ家とくハ全六。て本脇次郎
お照と祝言で大至成就またくくちト。我を

失念てゝ拍子を。奇妙。奇妙と打ッ音ユ。アイ
と下女ゲ返ゑさへ心爰よあくぶべ少ケどもきと
ぶこ獨リ云。イヨ春日屋の若且那。て。味イ。味イ
トうぶくぶくうしろのの〔モ〕モ孤ふあのいへ〔全〕エトぶうり
のまゆゆハ下女おくく〔モ〕モ孤ふ
振返り。ア。祇魚をつくうナア
廻る舞臺ハ正面三間かぶり仕ハ三の巻ヲ記ス。
ちまとより五回目春日屋の殿ちまり
明烏後正夢二の巻尾